

が満点でドイツ人試験官を驚かせたという。これは九大図書館で洋書目録の作成の仕事を通じて正しい独語の綴り方を養ったことと、ヘルタ・ミュラーとの交換教授に依るところが大きいと語っている。

ところでヘルタは大平洋戦争の始まる10カ月前に九大医学部を解雇されている。履歴書には昭和16年2月28日付で「願ニ依リ独文校閲囑託ヲ解ク、職務勉勵ニ付為手当金百円給与」と記されているだけである。彼女がユダヤ系であったことが或いは災いしたかも知れない。医学部で独文校閲の仕事が不要になったことは考えられぬ。彼女の後任として「シャーロツテ・ソフィー・サラ・シモニス」というドイツ女性が同年4月16日付で独文校閲囑託として雇い入れられたからである（『九大医報』第15巻第6号、昭和16年）。この女性は戦後、九大医学部で独話会話を教えた江崎シャルロツテ夫人である。

九大を辞めてからヘルタはアメリカに渡ったというが、その後の消息は不明である。『九州大学医学部五十年史』には彼女の名前は一回だけ登場するが、『九州大学七十五年史』や『写真集・九州大学史（1911～1986）』には全く登場しない。それでも彼女と何らかの交渉のあった人には忘れられぬ思い出となっているに違いない。

レーヴェンフェルダー、ヘルプスト両先生



レーヴェンフェルダー先生

最後に、筆者の九大独文科生時代の恩師である二人のドイツ人女性教師のことを書いて置きたい。40年近い昔のことではあり、しかも二人とも九大在勤は短期間だったので、もう覚えている人は少ないであろう。

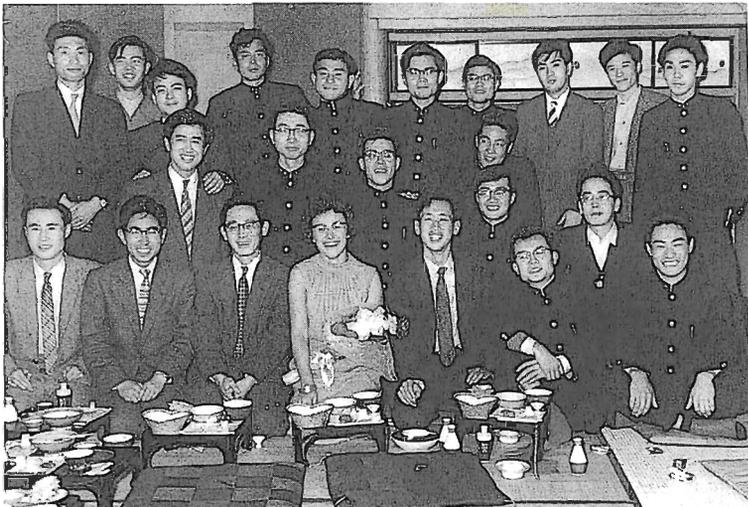
ドクトル・ゲルトラウト・レーヴェンフェルダー先生（Dr. Gertraud Löwenfelder）は、バイエルン州北部ヴュルツブルク市の東南約15キロに位置するマインベルンハイムという小さな町の出身で、生家は薬局。初め先生はマインツ大学で学び、次いでミュンヘン大学のボルヒェルト教授もとで演劇学を専攻し、ドイツで「オペラの初めより国立劇場創設（1651-1778年）に到るミュンヘン宮廷劇場の舞台装置」の研究で学位を受けた女性である。来日前はミュンヘン郊外のグラーフینگにあるゲーテ・インスティテュートで外国人

人にドイツ語を教えていた。この間スエーデンにも派遣され1年間講師として教えた。

1959年（昭和34）4月1日付で九州大学文学部の外国人教師として招聘された。ボルヒェルト教授の推薦によるものだった。戦後の九大文学部における最初のドイツ人教師であり、それまではドイツ人教師の講義と言えば、他大学から例えば、学習院大学のロベルト・シンチンゲル、南山大学のエルヴィン・ヤーン、東大のヴァーテノウといった方々が集中講義で見えていた。当時は現在のように教養のドイツ語の授業もドイツ人教師が当たるといった時代ではなかった。

筆者が九大文学部に入学したのは昭和33年4月であり、最初の1年半は六本松の教養部で過ごしたが、箱崎の専門課程に移って初めてドイツ人教師の講義を受けた。それがレーヴェンフェルダー先生だった。当時の独文科は高橋義孝教授、西田越郎助教授の時代である。

ゲート・インスティテュートは外国人にドイツ語を教えることを主な任務とする機関だから、先生はプロの語学教師であった。来日時34才であった。大変明朗、活発な女性で、じっとしているのが好きでないようだった。授業で思い出すのはいつか(昭和36年秋頃)会話の時間に、大学院の野田^{あきら}氏(現・東工大名誉教授)が留学中のドイツから先生宛に届いた手紙を披露されたことがあり、氏のドイツ語をはめていた。野田氏によると、氏はDAAD給費生としてミュンヘン大学に留学したが、この時はレーヴェンフェルダー先生の意見を入れて船旅だったという。そして1961年(昭和36年)8月末に長い船旅を終えて、ジェノヴァに上陸し、ミラノ、インスブルックを経てミュンヘンに入った。その途中のインスブルック滞在中に、ひとまず欧州に無事到着したとの第一信を認めた記憶があるとのことなので、先生が教室で披露した野田氏の手紙は恐らくそれであったろう。



レーヴェンフェルダー先生歓迎会：前列右より野田倬、恒吉良隆、相良憲一、レ先生、西田越郎助教授、根本道也、故土屋明人の各氏、中列左端樋口忠治、後列左より森田弘、4人おいて有村隆広の各氏(昭和34年、福岡・警固神社近くの料理屋にて)

それを見て、おぼろげながら理解したように思う。

先生は、着任の一年後には外国人官舎の隣家に住んでいた英国人教師 Jack Herbert 氏と結婚し、大学でも話題になった。先生自身、大学院生たち、根本道也(現・九大名誉教授)、森田弘(現・中央大学教授)の諸氏に結婚を促すなど目覚ましい働きをされた。これでも分かるように、筆者の先輩たちは一般に先生にかなり感化されたようだ。例えば相良憲一氏(現・京大名誉教授)は筆者宛の手紙で「お尋ねの Gertraud Löwenfelder-Herbert 先生は私の大事な先生です。彼女によって、私はドイツ語の長く辛い、不毛な *papiernes Verhältnis* を脱して *persönliches Erlebnis* とすることができたと思っています。この意味で彼女は私の恩人です」と語っている。九大初のDAAD留学生となった前記の野田氏の存在は、彼女の最も優れた業績の一つであると言えるであろう。

筆者が受けた講義で今でも思い出すのは、ドイツ文学史概説の講義で、確か朝1時限目に教育学部の教室で行われた。寒かったのを覚えている。講義はエラスムスから始まった。だがドイツ人教師の講義は初めてだったのでよく聞き取れなかった。何しろ教養部のドイツ語授業ではリスニングの練習など一切なかったのだから。ただよく板書する先生だったので、そ

参考までに、彼女の独文科での講義題目を『文学研究』（九州大学文学部）巻末の「彙報」欄によって紹介すると、次の通りである。

昭和34年4月～10月

（講義）ドイツ文学史概説

（演習）会話

昭和34年10月～35年3月

（講義）ドイツ文学史概説

（演習）ドイツ語会話

昭和35年4月～10月

（講義）Aufklärung, Sturm und Drang

（演習）Deutsche Konversation

（演習）Übungen zur Literaturvorlesungen (Klopstock, Lessing, Goethe)

昭和35年10月～36年3月

（講義）Goethe, Schiller, Hölderlin

（演習）„Iphigenie“ von Goethe, Gedichte von Schiller und Hölderlin

昭和36年4月～10月

（講義）Zwischen Klassik und Romantik, Romantik-Biedermeier

（演習）Zeichen der Zeit

（演習）ドイツ語会話

先生は昭和36年9月30日退官、夫君ハーバート氏と一緒に帰国した。帰国に際して『ラテルネ』4号（昭和36年10月）に「あればいいのにとと思うだろう全てのこと」（Was ich alles vermessen werde）を寄稿し、日本での思い出を語っている。先ず日本の景色の美しさを強調し、日本は風景国家だという。そして大きな松の木のある海岸や、よく手入れされた棚田はこの風景にマッチしている。私達が住んでいた今川橋の近くにあった大学の官舎は2階建て、書斎の前にテラスが付いており、博多湾が一望のもとに眺められた。ここを離れたくなかった。特に楽しかったのは、涼しい夏の夜、下を川が流れるバルコンで時々夜遅くまでパーティーをしたことで、忘れられない思い出だ。残念なのは、九州の山に白い煙のように、杏と桜の花が咲くという恐らく最も美しい典型的な日本の風景である春をもう体験できないことである。また京都の宝蔵を訪れることが出来ないのも残念だ。寺院や庭園を訪れると一種の素晴らしい心の平安がいつも感じられた。日本の風呂があればと切に思うだろう。この秋ドイツで西洋式の湯船に入るときと風邪を引くだろう。日本で食べられたような新鮮な魚はドイツでは得られないだろう。ホテルやデパートでのサービスの良さは並はずれている。総じて日本人は外国人を手厚くもてなす、などと述べている。

この文章から、先生は日本のいい思い出を持って帰国したことが分かる。

そして1965年（昭和40）まではミュンヘンのゲーテ・インストチュートで語学教師として勤務、夫君はミュンヘン大学の英語教師として教鞭を執っていた。その頃ミュンヘンに留学中の野田倬氏はザルツブルク旅行に誘われたり、61年末のクリスマスには前記の先生の生家に招待されたという。ドイツで先生から受けた忠告「床屋さんとタクシー運転手には必ずチツ

プを渡しなさい」は、今だにしっかりと憶えているとのことである。

その後ケンブリッジ大学の講師となった夫君とともにイギリスに移住し、先生も同大学の講師を勤めた。相良憲一氏はドイツ滞在中に2度ほどケンブリッジに先生を訪問し、前後20日間の楽しく、有意義な生活を過ごしたと語っている。先生の住所は次の通り。(相良氏の教示による)

Gertraud Herbert
34 Maids Causeway
Cambridge
CB6800
England

後任のインゲボルク・ヘルプスト (Ingeborg Herbst) 先生はDAADの派遣外国人教師として昭和38年11月29日に九大文学部に着任した。生まれ (1933) はハンブルクだが、父の仕事 (国家公務員) の関係上各地を転々として育った。大学はハンブルクとミュンヘンで、専攻はドイツ文学と歴史。学生時代には偏狭なゲルマニストにならないように、努めて各国を旅行したという。



ヘルプスト先生

九大に着任以来、学生の指導に当たる以外に、彼らとのハイキングには積極的に付き合っ、一緒に九重登山をしたり壱岐へもでかけたりした。住まいの今川橋の外人官舎へ独文科の学生たちをよく招いた。九大関係では同僚の伊藤利男先生とは個人的に親しかった。だが何分ドイツ人が少ない土地だけに各方面から種々雑多な依頼が持ち込まれたようだ。また日本人の好奇の目に晒されることも多く内心いろいろ苦労があったであろう。これは前任のレーヴェンフェルダー先生の場合も同様だったと見てよいであろう。

専門はテオドル・フォンターネであったが、講義では特にそれを取り上げることはなくゲーテなどの作品をドイツ文学全般にわたって講義した。演習では当時流行の Schulz-Griesbach の初級用テキストを用いて、例文反復などさせながら、辛抱強く、懇切丁寧に教えた。

文学部での講義題目は次の通り。

昭和38年10月～39年3月

(演習) ドイツ語学

(講読) ドイツ語学

(講義) ドイツ文学史

昭和39年4月～10月

(演習) 独語学初級 実用独語

(講義) ドイツ浪漫派

(演習) 現代ドイツ文学

(演習) 独会話

昭和39年10月～40年3月

(演習) Schulz-Griesbach

(演習) Übung mündlicher Sprachfertigkeit

(講義) Deutsche Romantik II.

(演習) Deutsche Literatur in 20. Jahrhundert

昭和40年4月～10月

(演習) Praktische Deutschübungen 会話

(演習) Schriftliche und mündliche Sprachfertigkeit

(演習) Der junge Goethe

(講義) Deutsche Literatur nach dem 1. Weltkrieg

昭和40年10月～41年3月

(講義) Der junge Goethe

(演習) Der Prosastil der deutschen Dichtung

Diktation und Konversation

昭和41年4月～10月

(演習) ヒヤリングとデクテーション

Modernes Deutsch in Sachtexten

(演習) Übung in Sprachlabor

(演習) Deutscher Prosastil vom Humanismus zur Gegenwart

(講義) Schiller

また、昭和40年春の中央大学における日本独文学会では「世俗化の初め」と題して研究発表を行った。

筆者の個人的な思い出としては、授業ではエブナー・エッシェンバッハの小品を習った記憶があり、修論の独文を見てもらいに先生を今川橋の外人官舎に訪問したことがあった。この時はなぜか独文科先輩の島康晴氏も一緒だった。だが先生は生憎留守で会えなかったので、当時先生と一緒に住んでいた垣本（旧姓伊藤）知子さん（現・第一薬科大教授）に論文を託して帰ったのを憶えている。

レーヴェンフェルダー先生と違って物静かな性格の方だった。おっとりしたお嬢さんタイプだったとの印象がある。先生の近くにいた垣本さんは筆者宛の手紙で先生の思い出を次のように語っている。

「私は外人官舎で数年をごいっしょに住まわせてもらうという幸運にめぐまれ、先生の人となり近くで拝察させてもらいました。今ふりかえてみますと、ドイツ語もほとんど理解できない私によく辛抱して付き合ってくださいましたものだと思います。先生から怒られたことは一度もありません。小さくなった洋服を手直してくださったり、官舎の近くの百道浜に散歩に連れて行ってくださるなど、姉のように可愛がっていただきました。先生はドイツ人の例にもれず綺麗好きで、一週間に一度、掃除のおばさんを頼んで窓ガラスをきれいにふかせ、タオルま

でアイロンをかけさせる徹底ぶりでしたが、反面、官舎の一室を可愛がっている猫の部屋にして、そこは汚しておいても平気というような柔軟性がありました。先生は勉強家で九大での講義のない日は、いつも朝から書斎に閉じこもって終日仕事をして居られました。当時、先生は外人官舎から箱崎の九大までルノーで通勤しておられました。』

ヘルプスト先生は昭和41年10月31日帰国した。そして南ドイツの Allgäu 地方の Staffelsee に住んでギムナジウムの教師をしていたが、1991年（平成3）3月に乳ガンのために世を去った。享年57。先生は生涯独身であった。生前の先生を同地に訪ねた人には伊藤利男先生、垣本さん、米沢充氏（現・佐賀大教授）などがある。垣本さんは墓参りもされた由である。筆者は70年（昭和45）から1年間ミュンヘンに留学したが、折角近くにいながら、その時先生を訪問しなかったことを今とても残念に思う。